

一般市民の医薬品および医療に関する意識調査

概 要

平成 18 年 1 月

くすりの適正使用協議会

# 目次

## I. 調査の概要

I-1. 調査の目的

I-2. 調査設計

I-3. 調査結果の集計・分析方法

## II. 調査結果

II-1. 回答者の属性

II-2. 概要

II-3. 調査結果内容

1. くすりの説明と理解
2. くすりの情報収集
3. くすりの服用
4. くすりの副作用に関する意識
5. 医薬分業
6. 学校教育関連

## I 調査の概要

### I-1. 調査の目的

- 1) 1999年の調査結果にみる医療・医薬品に関する一般市民の意識がどのように変わってきているかを把握する。
- 2) 慢性疾患患者とその他の者との医療・医薬品に関する意識の違いを把握する。
- 3) 上記結果を踏まえ、学校教育関連や新しい「くすりのしおり」など今後の協議会の活動の方向性を検討する基礎資料とする。

### I-2. 調査設計

調査名： 薬に関するアンケート

調査方法： FAX による調査票の送付と回収

調査対象： 20-69 歳の全国成人男女

抽出条件： 株式会社日本能率協会総合研究所が保有する FAX 調査パネルから対象者を抽出条件に基づき選定

調査期間： 2005 年 10 月 13 日(木)～18 日(火)

配布数・回収率：	参考: 1999 年度実施調査
配布数: 2,000	配布数: 2,120
回収数: 1,607	回収数: 1,745
回収率: 80.4%	回収率: 82.3%

調査実査機関： 株式会社日本能率協会総合研究所

企画協力・分析機関： スナッジ・ラボ株式会社

### I-3. 調査結果の集計・分析方法

計 45 問(内副問 16 問)の設問を以下の A～H の項目に分類して集計・分析を行った。

- A. 健康に関する意識
- B. 医師や病院に関する意識
- C. くすりの説明と理解
- D. くすりの情報収集(入手)
- E. くすりの服用
- F. くすりの副作用に関する意識
- G. 医薬分業
- H. 医薬品学校教育関連

## II. 調査結果

### II-1. 回答者の属性

属性	実数 (人)	構成比 (%)
<u>1. 性別</u>		
男性	755	47%
女性	852	53%
<u>2. 年齢</u>		
20代	279	17.4
30代	321	20.0
40代	329	20.5
50代	342	21.3
60代	336	20.9
<u>3. 職業</u>		
経営・管理職	74	4.6
専門・技術職	199	12.4
自営業	125	7.8
常勤の勤め人	329	20.5
パート・アルバイト	262	16.3
専業主婦	439	27.3
学生	22	1.4
無職	124	7.7
その他	31	1.9
不明	2	0.1
<u>4. 最終学歴</u>		
中学卒	67	4.2
高校卒	703	43.7
短大・高専・専門学校卒	390	24.3
大学・大学院卒	442	27.5
不明	5	0.3

属性	実数 (人)	構成比 (%)
----	--------	---------

5. 現在の通院状況

慢性的な病気で通院中	475	29.6
カゼやケガなどの急性疾患で通院中	64	4.0
現在通院はしていない	1063	66.1
不明	5	0.3

## II-2. 概要

1999年の調査結果にみる医薬品および医療に関する一般市民の意識がその後どのように変わってきているかを、また慢性疾患で通院中の患者(以下、「慢性疾患患者」という。)とそれ以外の者の意識の違いを検証するとともに、今後の協議会活動の方向性を検討する基礎資料を得ることを目的として、本調査を2005年に実施した。

前回の調査結果(以下、「前回」と略す。)に比較して、処方された薬(以下、「処方薬」という。)の名前や効能・副作用を「知っている～大体知っている」とする医薬品情報に対する認知度、説明に対する理解度、充分説明を受けたと評価する割合は、いずれも高くなっている。「充分説明を受けた」との評価は、調剤薬局において薬を受け取ったとする者に多かった。情報入手先の割合も薬剤師からが多くなってきており、また、印刷物、お薬手帳の普及の増加もみられている。印刷物として望まれるものは、薬の写真の掲載、注意点のカラー印刷等視覚に訴えるものが多い。

説明を受けた内容は、「効き目」、「服用方法」が多く、「薬の名前」と続き、ついで「副作用」、「保管方法」、「飲み合わせ」、「副作用が出た時の対処方法」等であり、前回とほぼ同様であった。一方、処方薬について知りたいとする情報は「効き目」に加えて「副作用」が多いことが明らかになった。つまり、一般市民は「副作用」に関連する情報を多く望んでいるにも拘わらず、実際の説明は充分でないことが示唆されるものであり、この傾向は前回から変わっていなかった。

医師に対して求める説明は「効き目」と「副作用」が多いが、薬剤師に対してはこれらに加えて、「服用方法」、「飲み合わせ」等の処方薬の取扱いに関するものが多く、医師と薬剤師に求める情報の内容に相違があることが明らかになった。医薬分業の認知度は、前回と変わらなかった。

処方薬の服用状況、処方薬が余った時の対処法については、前回と大きな差はみられなかった。

副作用に関する意識については、前回と大きな変化はなかったが、「処方薬に対して不安を感じたことが一度もない」が多少増加の傾向がみられ、副作用の経験者が減少している傾向がみられた。

慢性疾患患者は、その他の者と比較して、処方薬に対する不安感や副作用に対する懸念、また副作用の経験が高い傾向にあるものの、ある程度は仕方ないとする容認派が多い傾向にあった。慢性疾患患者は、その他の者に比較して、処方薬に関する名前や効能・副作用、医薬分業に対して高い認知度を持っていた。

学校教育で医薬品の正しい使い方を取り上げることについて、必要だと考える一般市民は76%に達し、慢性疾患患者ではその意識が高かった。なお、年齢に応じ段階的に指導することが必要とする人が過半数を超えていた。

以上まとめると、処方薬に関する一般市民の認知度、説明への理解度は高まってきており、これには印刷物を用いた説明、調剤薬局の役割等が関連していると考えられる。しかしながら、副作用関連の情報について、多くの一般市民が望んでいるにも拘わらず、医療の現場では十分な説明がなされていないこと、一般市民は医師と薬剤師の役割に応じた情報提供を求めていることにも留意すべきである。さらに、慢性疾患患者は医薬品・医療に対する意識が概して高い傾向にあること、更には、一般市民が学童時代からの薬教育のニーズを持っていることは、注目に値するといえよう。

## II-3. 調査結果内容

### 1. くすりの説明と理解

#### 1) 処方された薬の認知

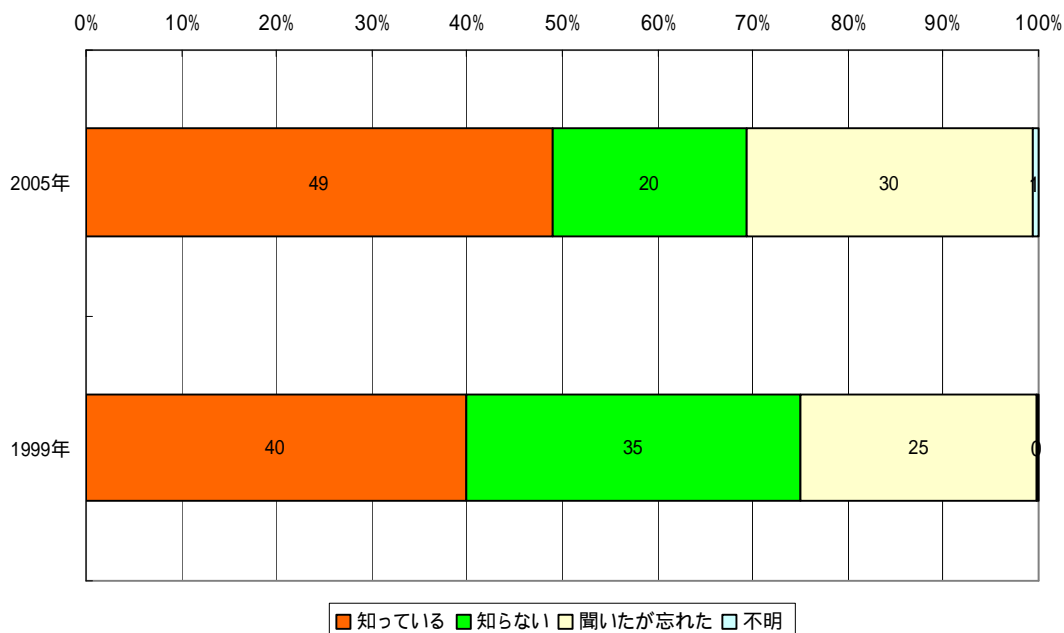
処方された薬の名前を「知っている」が 49%、「知らない」が 20%、「聞いたが忘れた」が 30%で、約半数が薬の名前を認知していた。99 年調査結果では、順に 40%、35%、25%であるので、薬の名前に対する認知水準が向上したといえる。慢性疾患で通院している者の認知は非常に高く 84%にのぼり、それ以外の者は 34%に留まった。

処方薬を受け取った場所(施設)によって、薬の名前の認知に差異があるかを確認したところ、「病院や院内で薬を受け取った」が 48%、「病院(医院)外の調剤薬局で薬を受け取った」のは 52%であった。調剤薬局で受け取った場合の方がやや認知度が高かった。

薬の名前を「知っている」者の情報入手元は、「印刷物をもらった」が最も多く 63%、次いで「薬剤師から聞いた」が 48%、「医師から聞いた」が 45%となっている。99 年調査結果では「医師から聞いた」が 49%、次いで「印刷物でもらった」が 40%、「薬剤師から聞いた」が 37%であったことと比較して情報の入手経路に変化が見られた。慢性疾患で通院している者は、「医師から聞いた」が 55%で、それ以外の者の 36%と比較して高い傾向にあった。

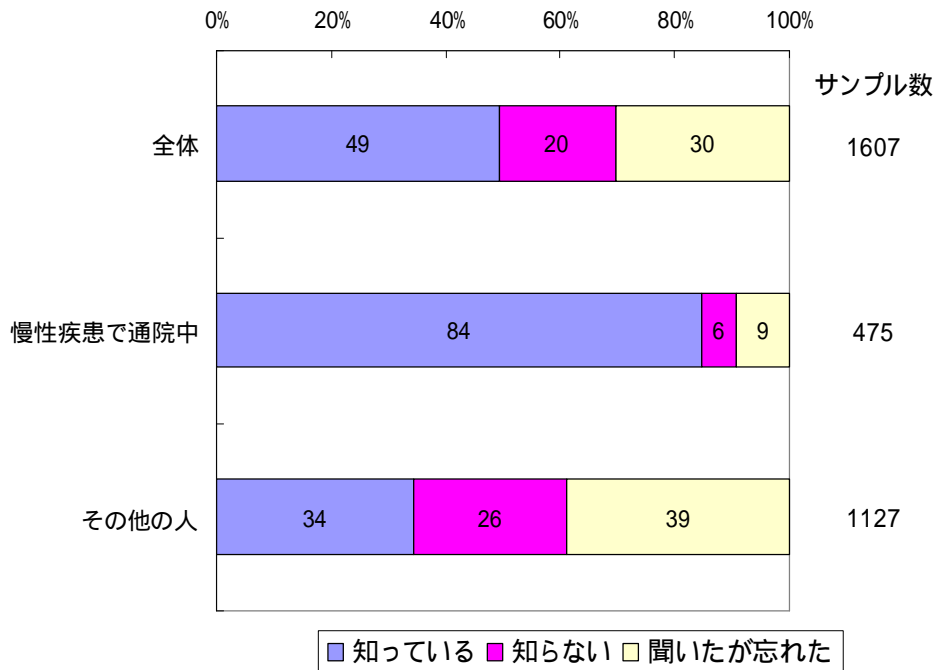
処方された薬の名前を知っていますか。( はひとつ )

n=1607

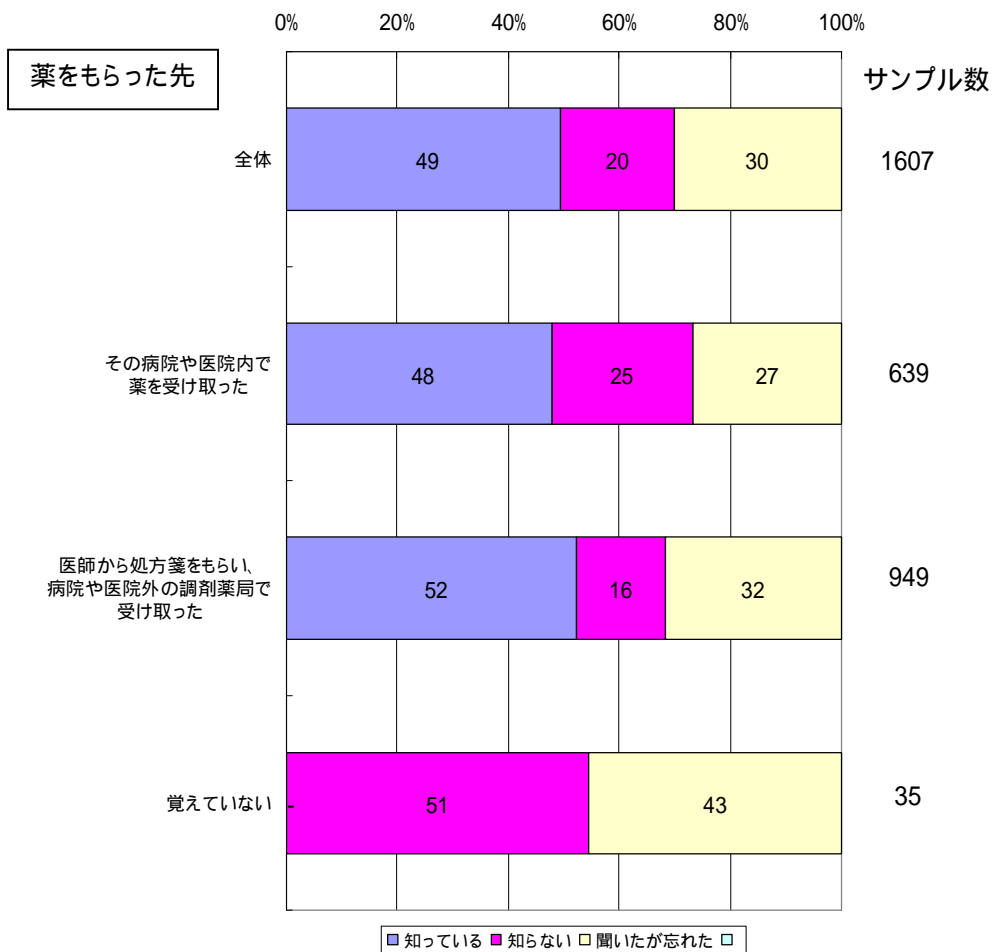




### 処方された薬の名前の認知

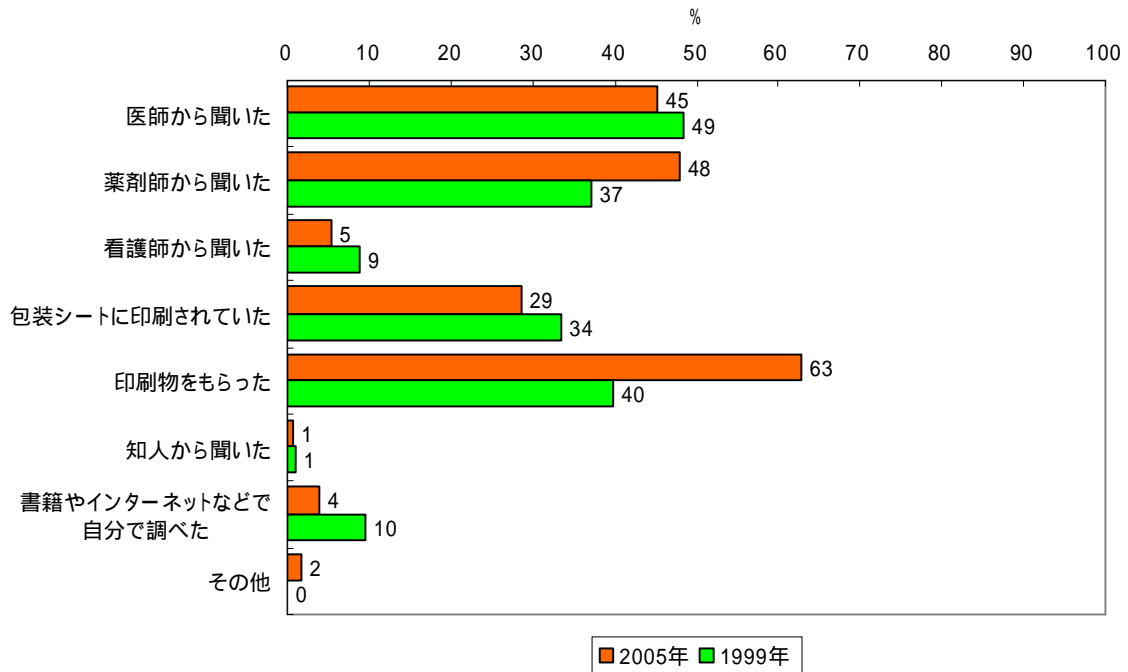


### 処方された薬の名前の認知



## 処方薬の名前の認知経路

n=788

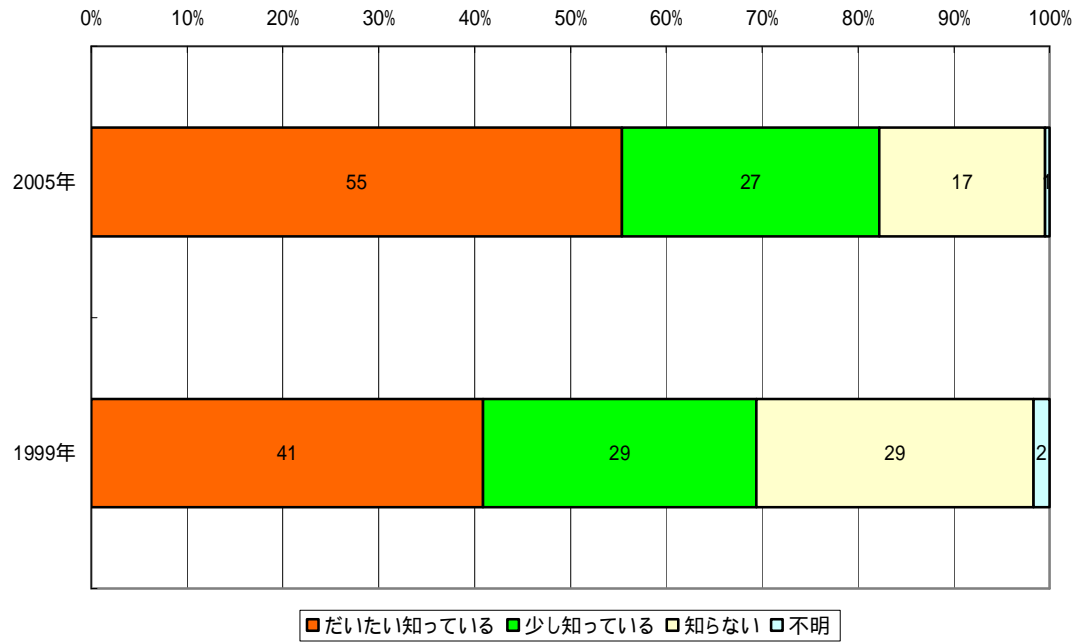


## 2) 処方薬の効能や副作用の認知

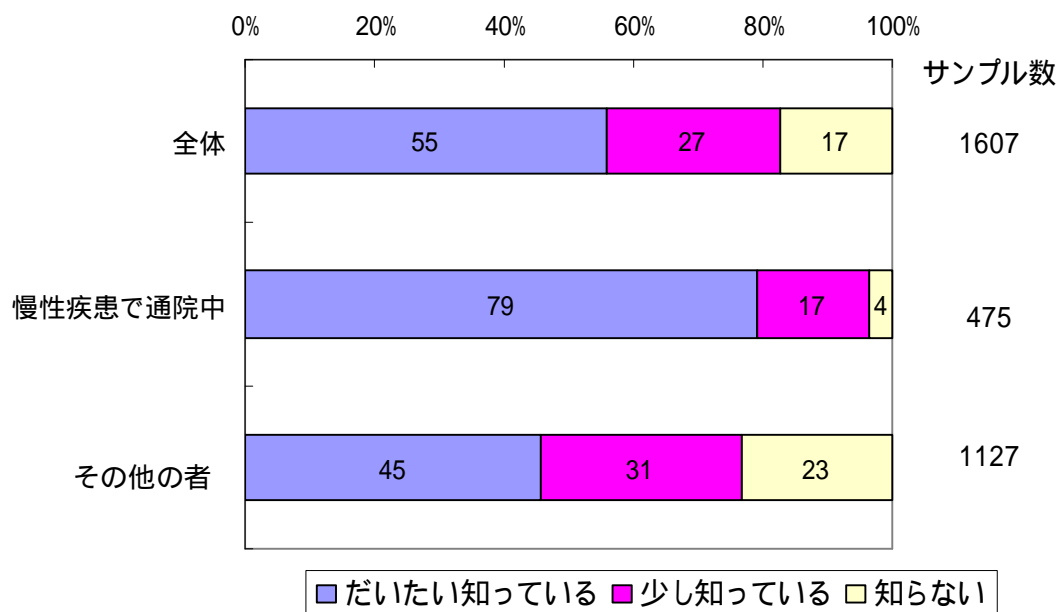
処方薬の効能や副作用について、「だいたい知っている」が 55%と半数以上を占め、「少し知っている」が 27%、「知らない」が 17%となった。99年度調査ではそれぞれ 41%、29%、29%であったことと比較して、効能や副作用に関する認知水準が向上しているといえる。「だいたい知っている」について慢性疾患で通院している者は 79%、それ以外の者が 45%であり大きな差異が見られた。処方薬を受け取った場所(施設)によって、薬の効き目や副作用に関する認知に差異があるかをみたところ、「病院や院内で薬を受け取った」者で 54%、「病院(医院)外の調剤薬局で薬を受け取った」者が 58%であった。調剤薬局で受け取った場合にやや認知度が高かったが、大きな差異は見られなかった。

その時に処方された薬は、どのような効果(効き目)や副作用があるかご存知ですか。  
( はひとつ)

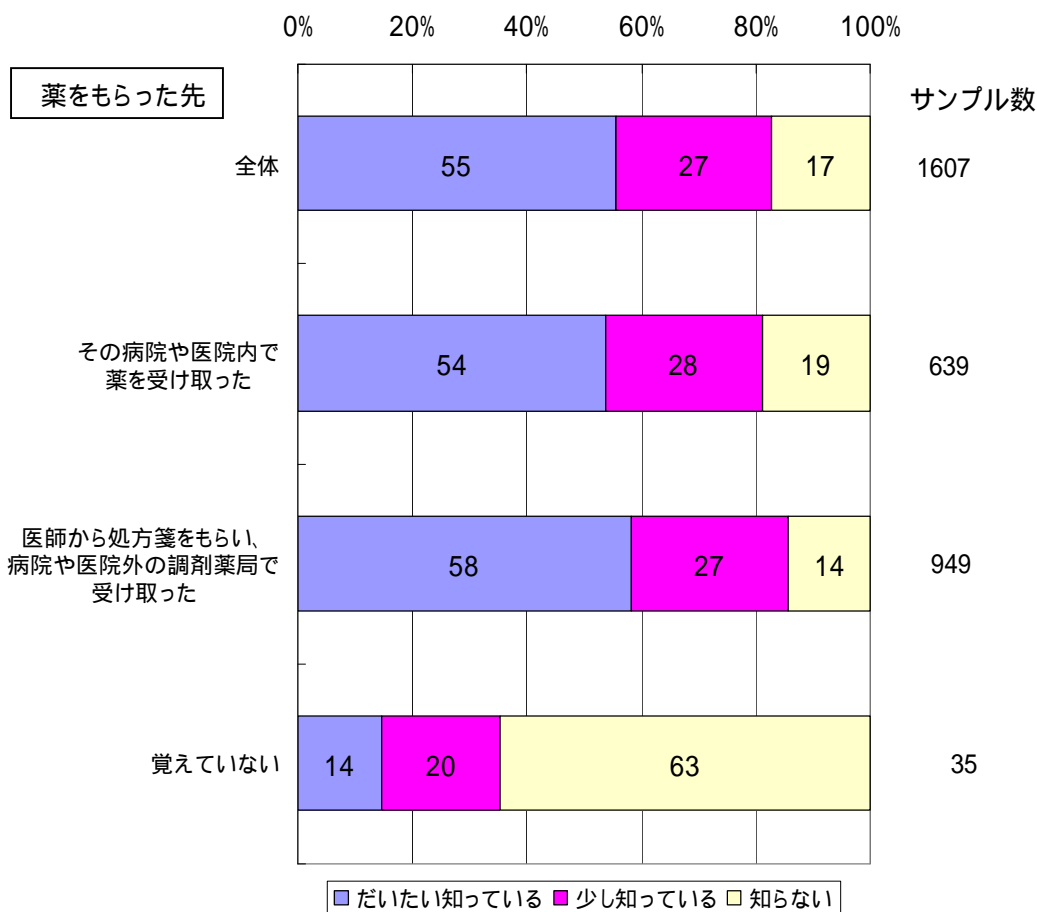
n=1607



処方薬の効果や副作用の認知



### 処方薬の効果や副作用の認知



### 3) 処方薬についての説明の有無

処方薬に関して「充分説明を受けた」が 44%、「少し説明を受けた」が 49%、「全く説明を受けていない」が 6%となっており、93%の者が説明を受けている。99 年調査では順に 28%、59%、11%であったことから、「充分説明を受けた」水準が大幅に向上したといえる。なお、慢性疾患で通院している者は 53%、それ以外の者は 41%であった。

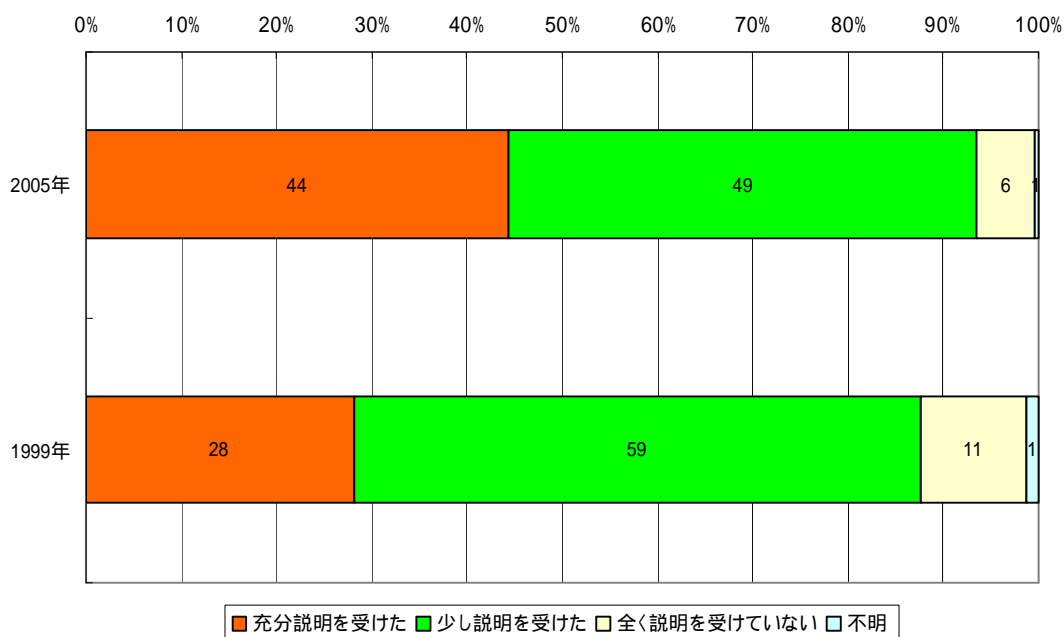
処方薬を受け取った場所(施設)によって、説明の有無に差異があるかを確認したところ、「病院や院内で薬を受け取った」者で「充分説明を受けた」と回答したのが 37%であるのに対し、「病院(医院)外の調剤薬局で薬を受け取った」者は 51%であり、大きな差異がみられた。

処方薬に関する説明は「薬剤師から」受けた者が 69%、「医師から」が 50%であった。99 年調査ではそれぞれ 57%、52%であり、「薬剤師」による説明が向上していることがわかる。慢性疾患で通院している者は、「医師から」の説明が 69%であり「薬剤師から」の 63%を上回っている。それ以外の者は、「薬剤師から」の説明が 71%、「医師から」の説明が 41%であった(複数回答)。

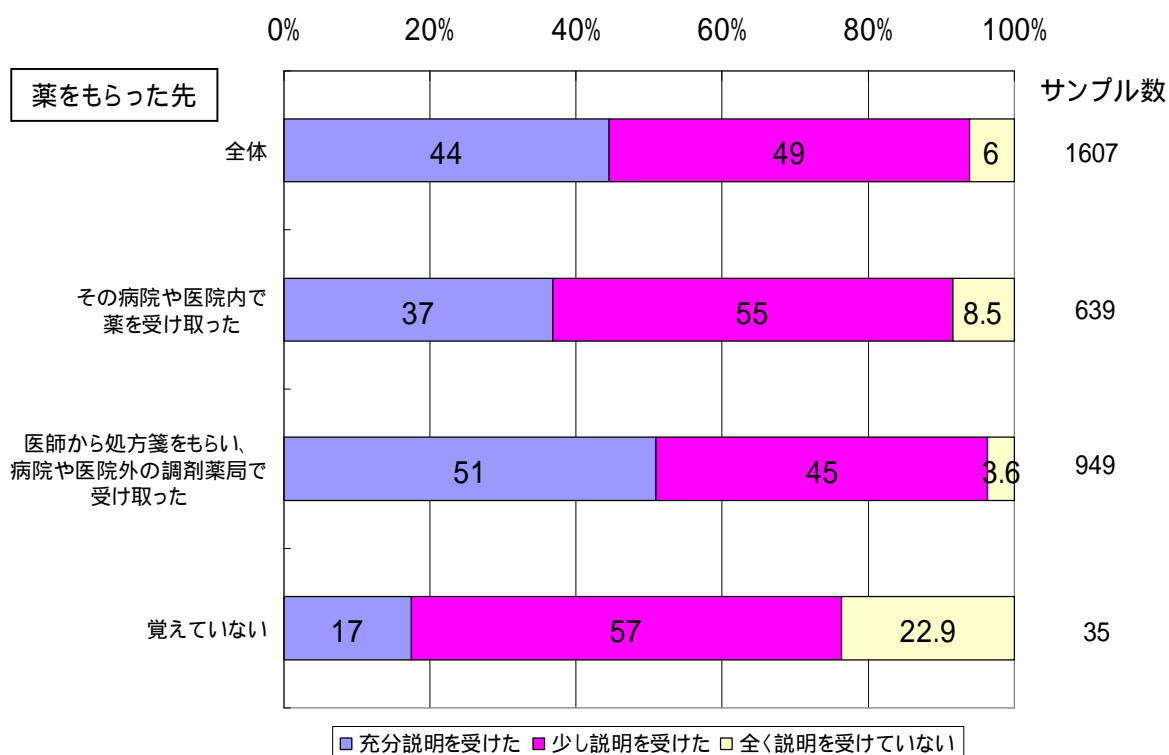
あなたは、その時に処方された薬の「薬の名前」「効き目」「飲み方」「副作用」について、医師や薬剤師、看護師から説明（印刷物も含む）を受けましたか。

（ はひとつ）

n=1607

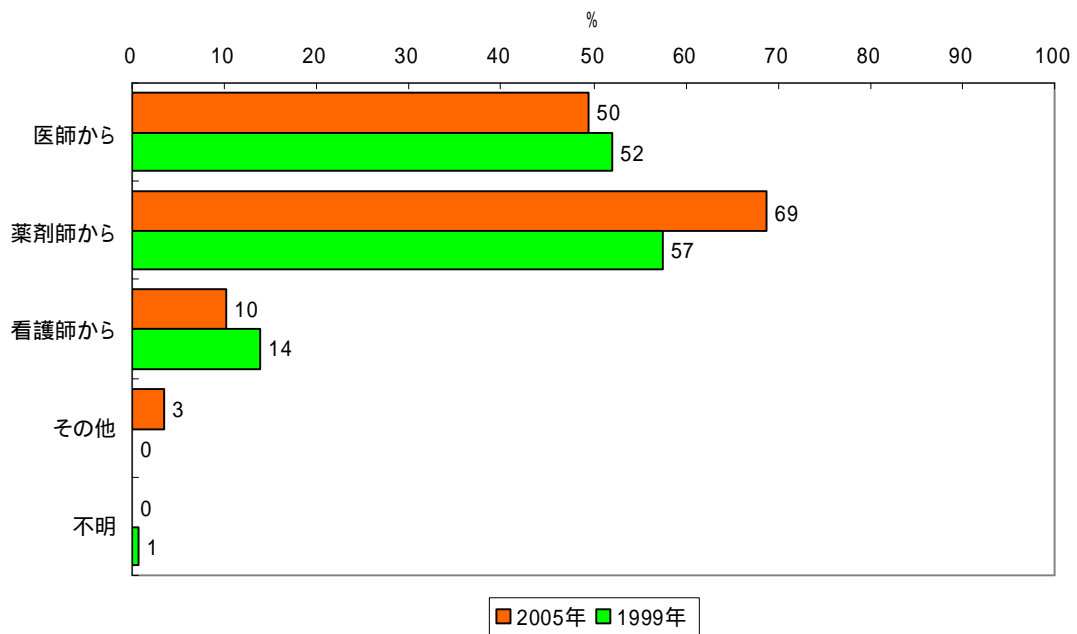


### 処方薬についての説明の有無



それは、誰から説明を受けましたか。( はいくつでも )

n=1502

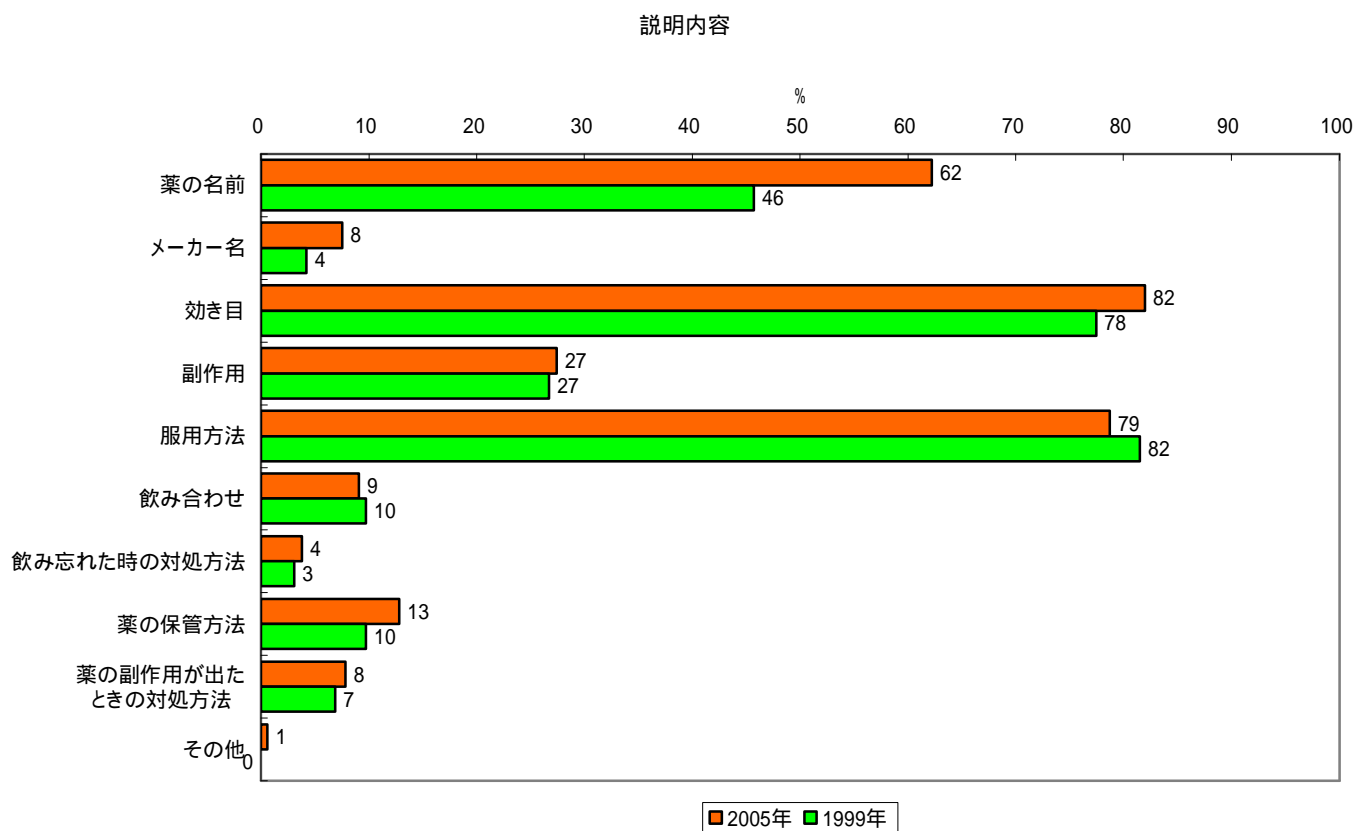


#### 4) 処方薬についての説明内容

説明の内容は、「効き目」が 82%で最も多く、次いで「服用方法」が 79%であった。99 年調査では、それぞれ順に 78%、82%であり、ほぼ同水準であった。なお、「薬の名前」については、99 年調査の 46%に対し、今回は 62%と著しく増加している。

では、どんな説明（印刷物も含む）を受けましたか。（はいくつでも）

n=1502

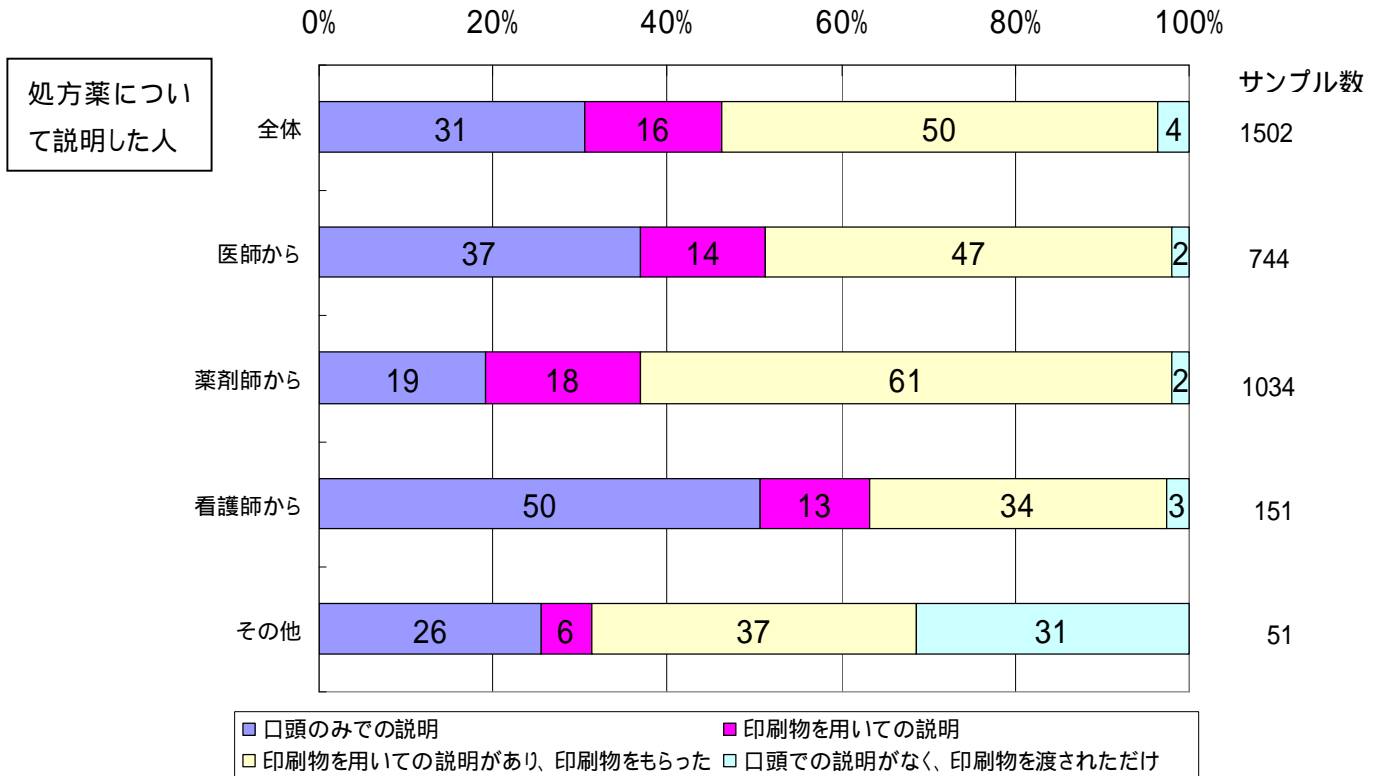


### 5) 処方薬についての説明方法

説明の方法としては、「印刷物を用いての説明があり、印刷物をもらった」が 50%、「口頭のみで説明」が 31%、「印刷物を用いて説明」が 16%であった。なお、慢性疾患で通院中の者は、それぞれ 47%、32%、17%であり、それ以外の者の 51%、30%、30%とあまり差異はみられなかった。

説明を行った者によって説明方法に差異があるかを確認したところ、「口頭のみでの説明」は「医師から」が 37%、「薬剤師から」が 19%、「看護師から」が 50%であった。一方、「印刷物を用いての説明があり、印刷物をもらった」は、「医師から」が 47%、「薬剤師から」が 61%、「看護師から」が 34%であり、薬剤師からが多いことから、薬剤師が丁寧に説明していることが窺える。

どのように説明を受けましたか（ はひとつ）



6) 処方薬の説明と理解

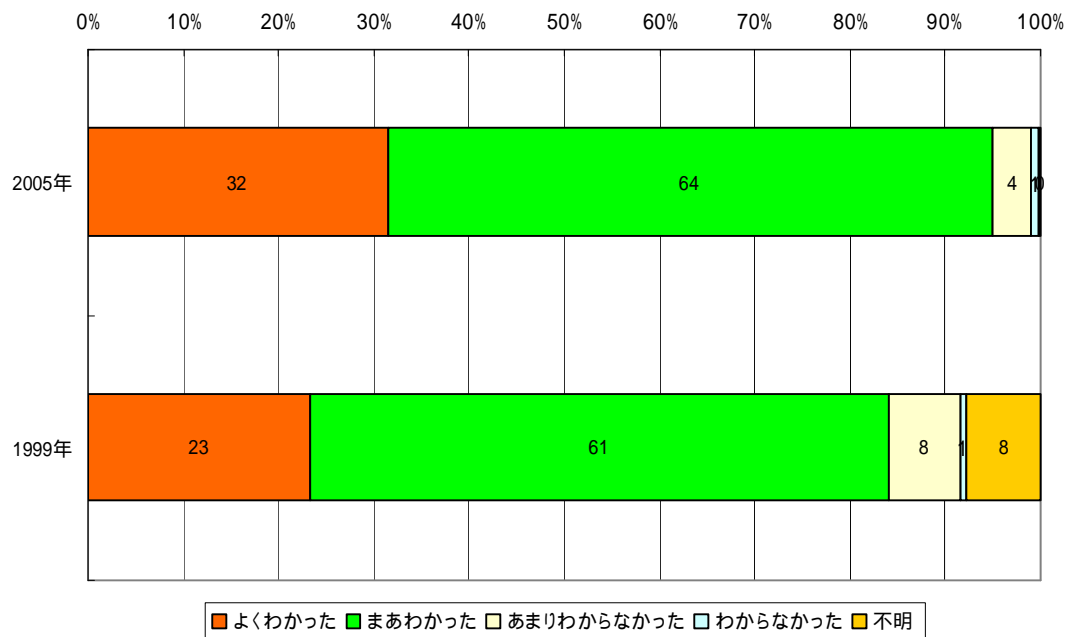
説明の理解度は、「よくわかった」が 32%、「まあわかった」が 64%であり、96%の者が説明を理解している。99 年調査では、それぞれ 23%、61%で合計 84%であったので、理解している者が増加する傾向にあった。なお、慢性疾患で通院している者は、39%、57%、それ以外の者は 28%、66%であり、理解の程度に差はなかった。

説明を行った者によって説明の理解度に差異があるかを確認したところ、説明が「よくわかった」は、「医師から」が 39%、「薬剤師から」が 33%、「看護師から」が 31%で、「医師から」の説明に対する理解度がやや高かった。

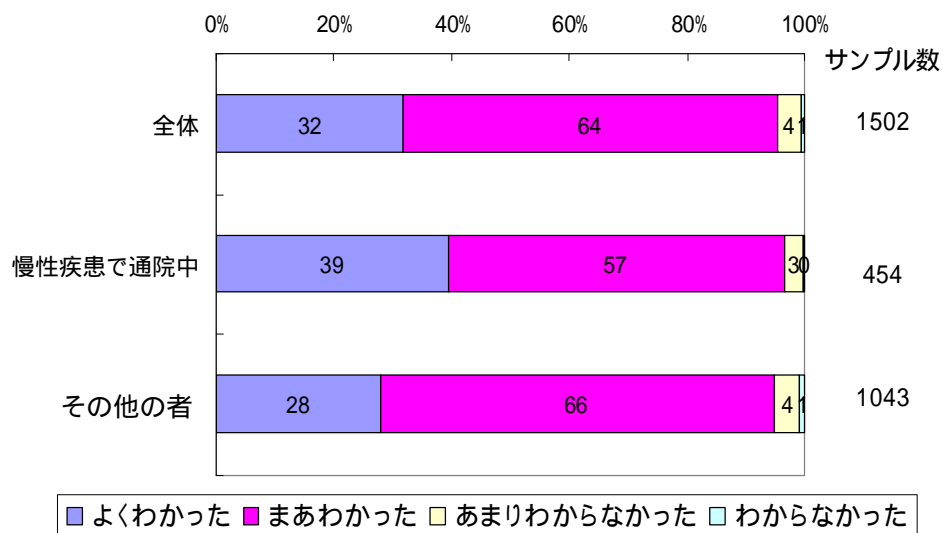


その説明を受けて、どの程度、説明の内容がわかりましたか。( はひとつ)

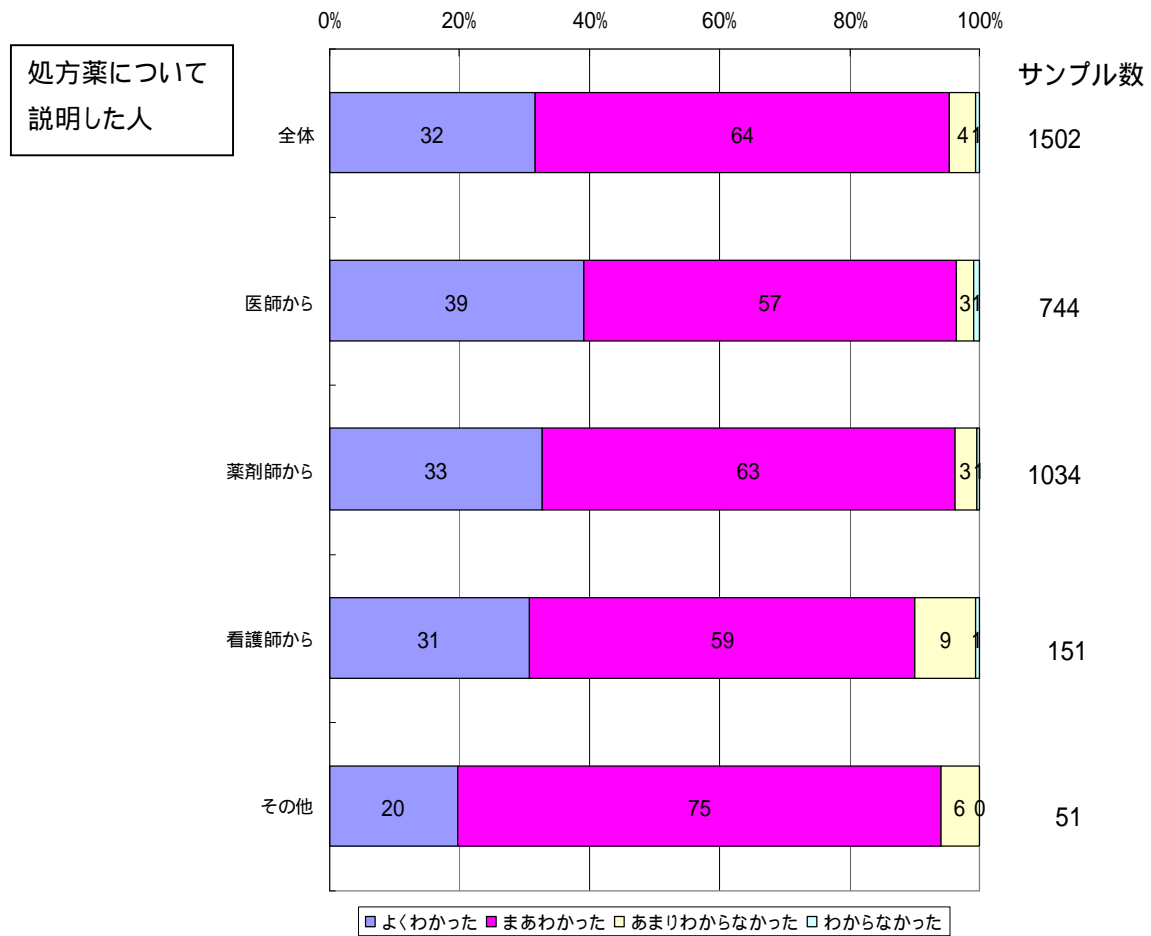
n=1502



### 処方薬についての説明の理解度



## 説明の理解度



## 2. くすりの情報収集

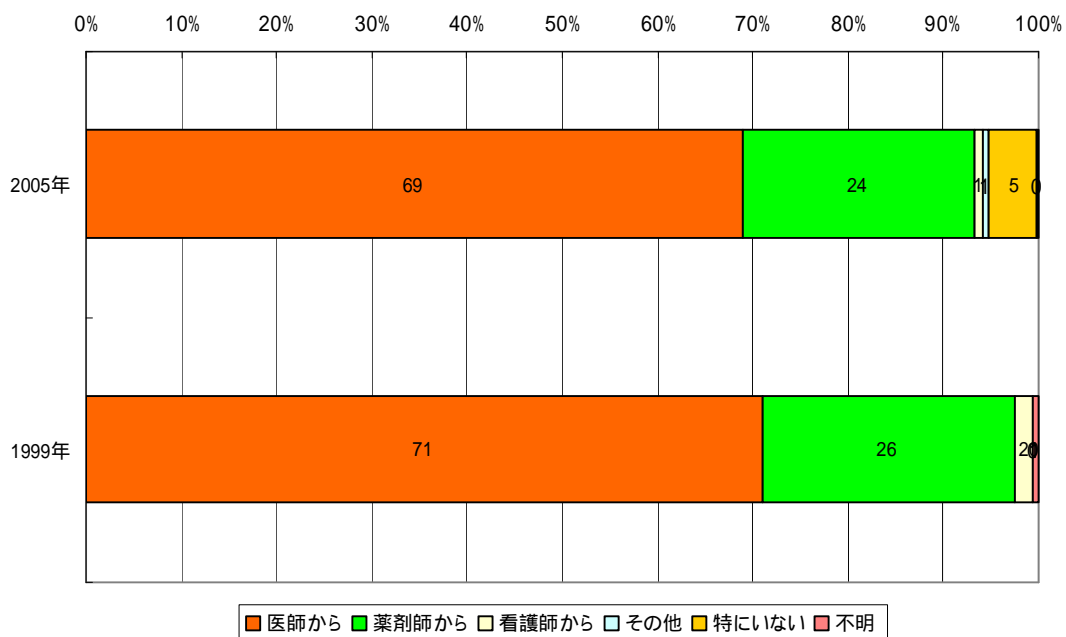
### 1) 薬の説明を聞きたい者

説明について、「医師から」聞きたいは 69%、「薬剤師から」聞きたいが 24%であり、99 年調査結果の 71%、26%とほぼ同じ傾向であった。なお、慢性疾患で通院している者は「医師から」聞きたいが 79%と、全体より高く、それ以外の者は 65%と全体よりもやや下回った。

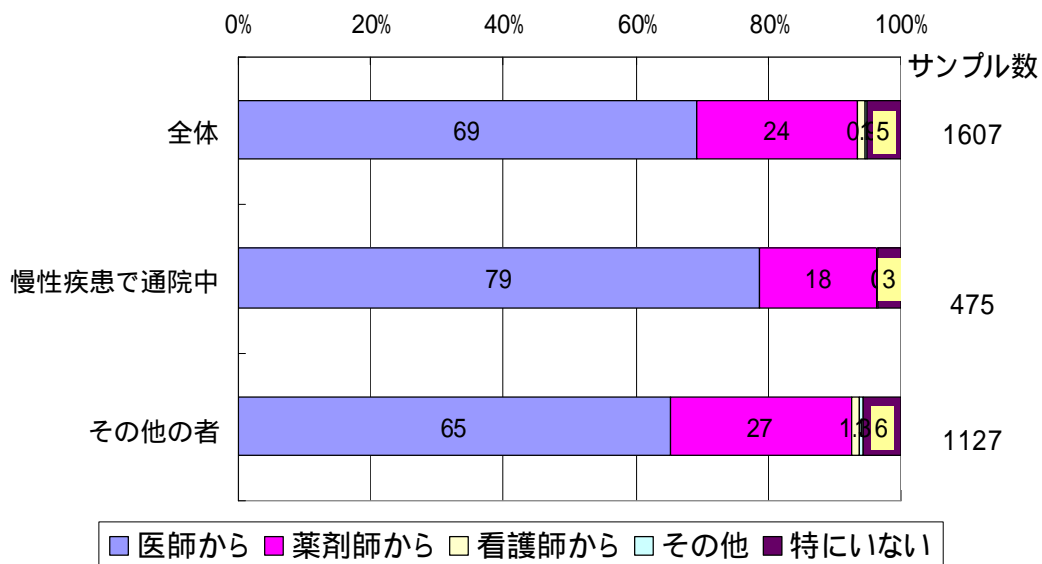
説明は本来誰がすべきかの問いに対しては、「医師から」が 81%、「薬剤師から」が 17%であり、圧倒的に「医師」の役割であるとしている。なお、慢性疾患で通院している者の 85%、それ以外の者の 78%が「医師」が薬の説明をすべきとしている。

あなたは、医師が処方した薬の「説明」を誰から聞きたいと思いますか。最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。( はひとつ)

n=1607



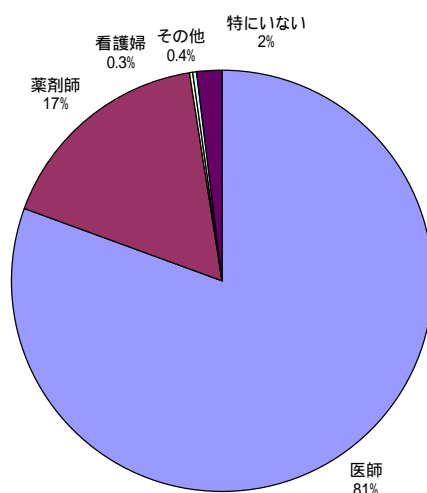
薬の説明を聞きたい人



## 薬の説明をするべき人

では、あなたは、医師が処方した薬の「説明」は、本来、誰がするべきだと思いますか。  
最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。( はひとつ)

n=1607



## 2) 薬をもらう時に知りたい情報 (複数回答)

薬をもらう時に知りたい情報として、「効き目」が 84%と最も高く、次いで「副作用」が 70%であった。

99 年調査ではそれぞれ 81%、72%であるのでほぼ同じ傾向であった。

薬をもらう時に知りたいとする情報は、「効き目」と「副作用」が多いが、前項 1.- 4) 実際に受けた説明内容(どんな説明を受けましたか)では、「副作用」に関連する情報は低い。

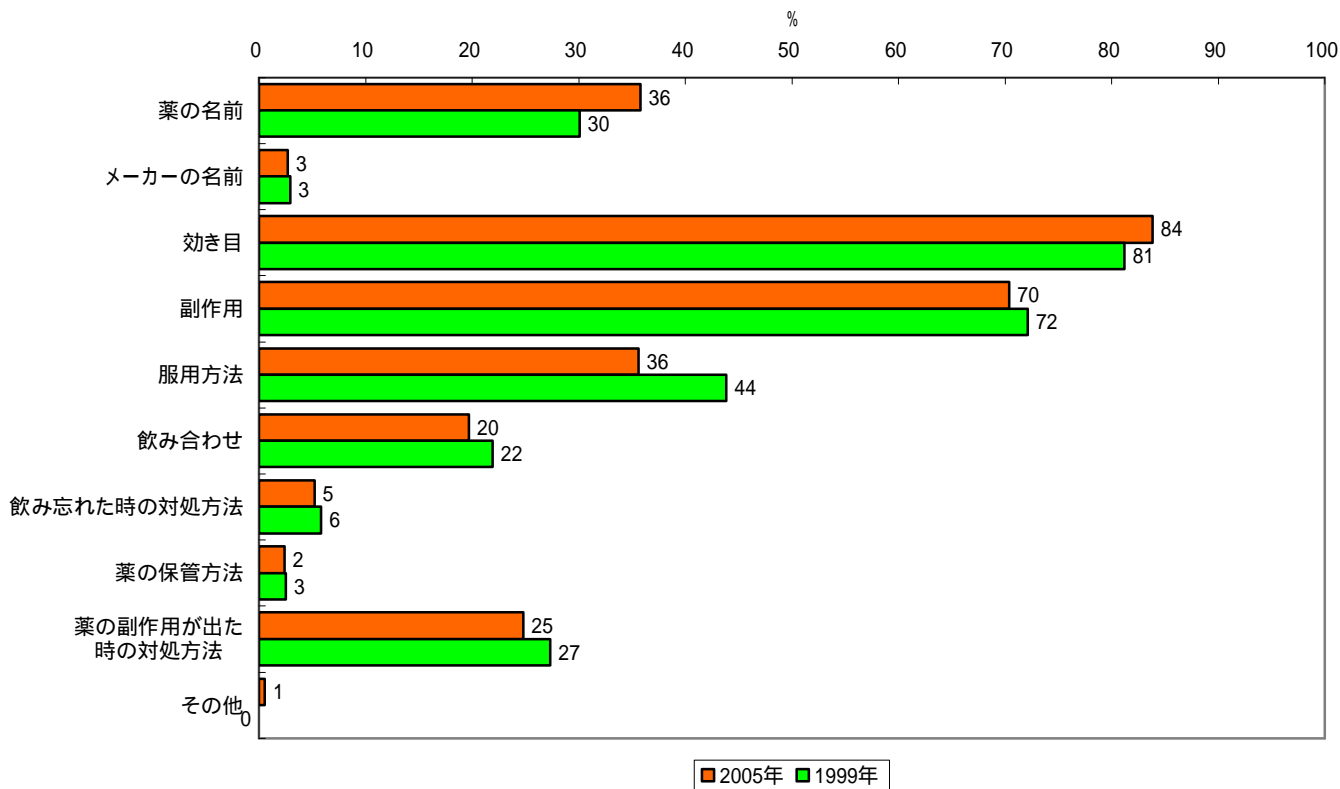
これらの結果は、「副作用」に関連する情報は多く望まれているにも拘らず、実際には十分でないことを示唆している。

なお、医師から処方薬について知りたい情報としては、「効き目」が 85%で最も多く、次いで「副作用」が 72%と他を圧倒していた(複数回答)。また、薬剤師から処方薬について知りたい情報としては、「効き目」が 60%で最も多く、次いで「副作用」が 56%、「服用方法」が 46%であった(複数回答)。

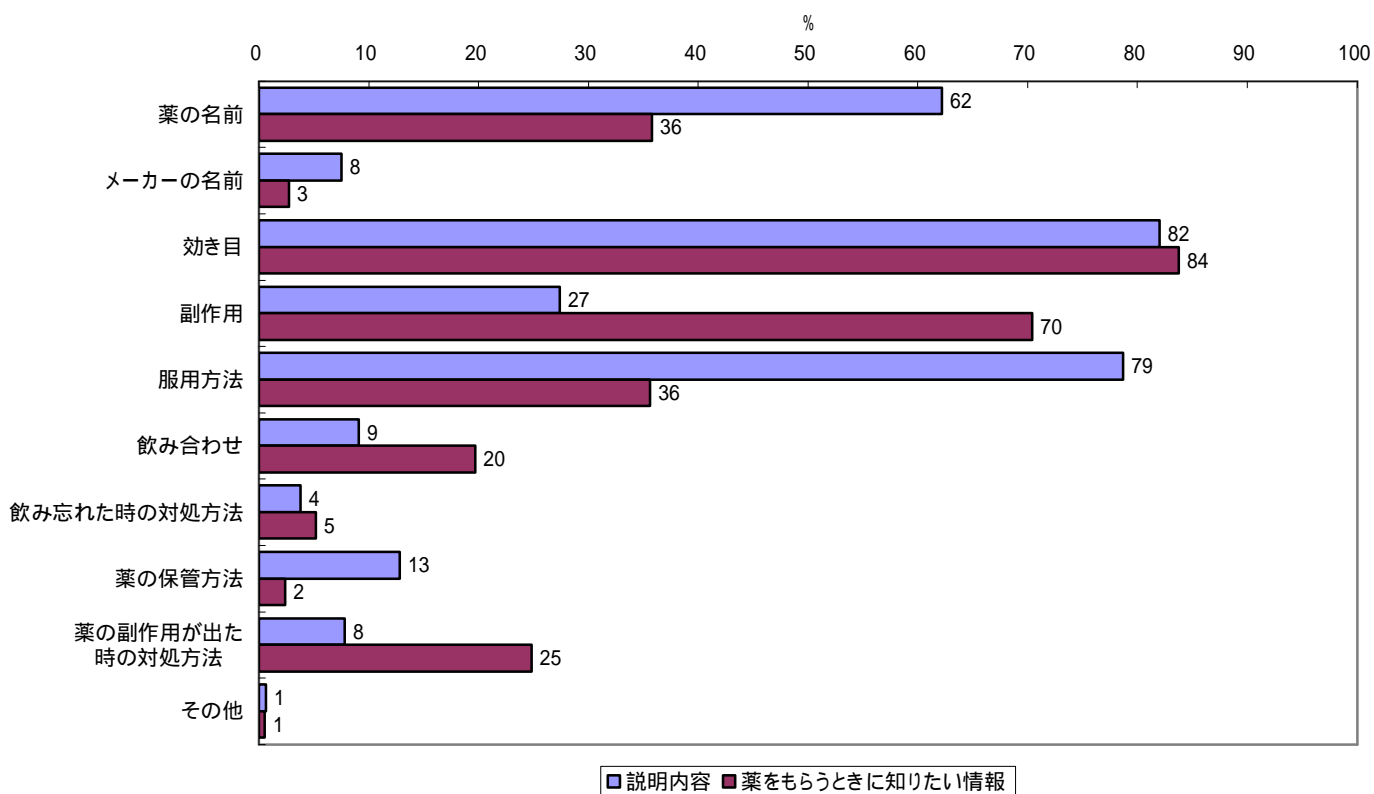
「効き目」「副作用」については、医師と薬剤師に共通して、知りたい情報の上位にあるが、薬剤師については、他の情報、例えば「服用方法」「飲み合わせ」「飲み忘れたときの対処法」「薬の保管方法」という薬の取り扱いに関する情報を求める割合が高かった。このことから、薬剤師の役割について一般市民がそれなりに理解していることが明らかになった。

あなたは、医師が処方した薬をもらう時、どんな情報を知りたいですか。  
3つまで選んで番号をご記入下さい。

n=1607

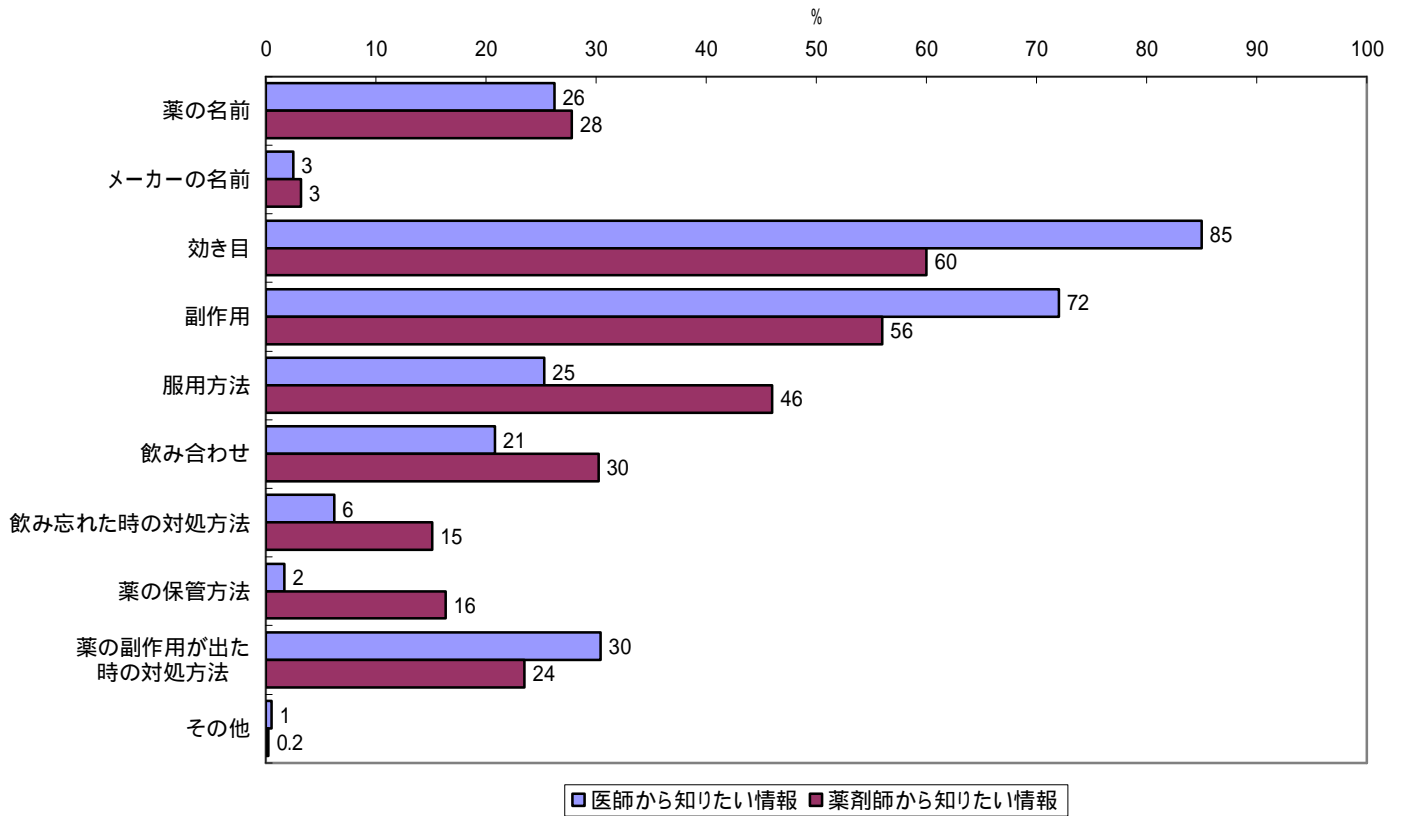


説明を受けた内容と薬をもらう時に知りたい情報の対比



# 薬をもらう時に医師または薬剤師から知りたい情報

n=1607



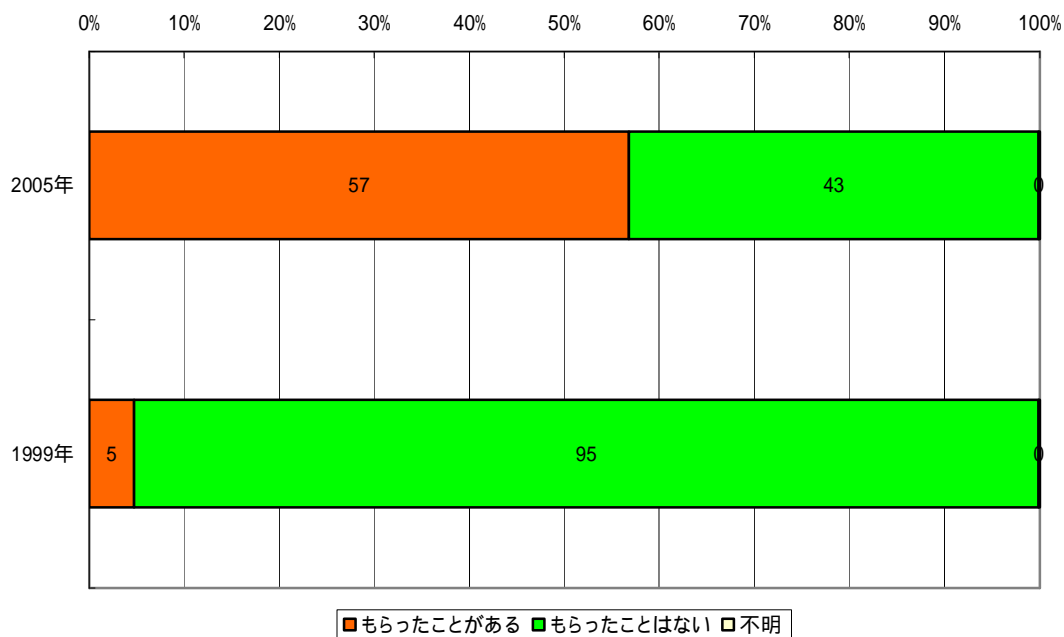
### 3) お薬手帳をもらった経験

お薬手帳を「もらったことがある」が 57%、「もらったことはない」が 43%となっており、99 年調査の「もらったことがある」がわずか 5%と比較して、お薬手帳が大幅に普及したことが明らかになった。なお、慢性疾患で通院している者は 62%、それ以外の者は 55%であった。

あなたは、病院・医院や調剤薬局で「お薬手帳」をもらったことがありますか。

( はひとつ )

n=1607

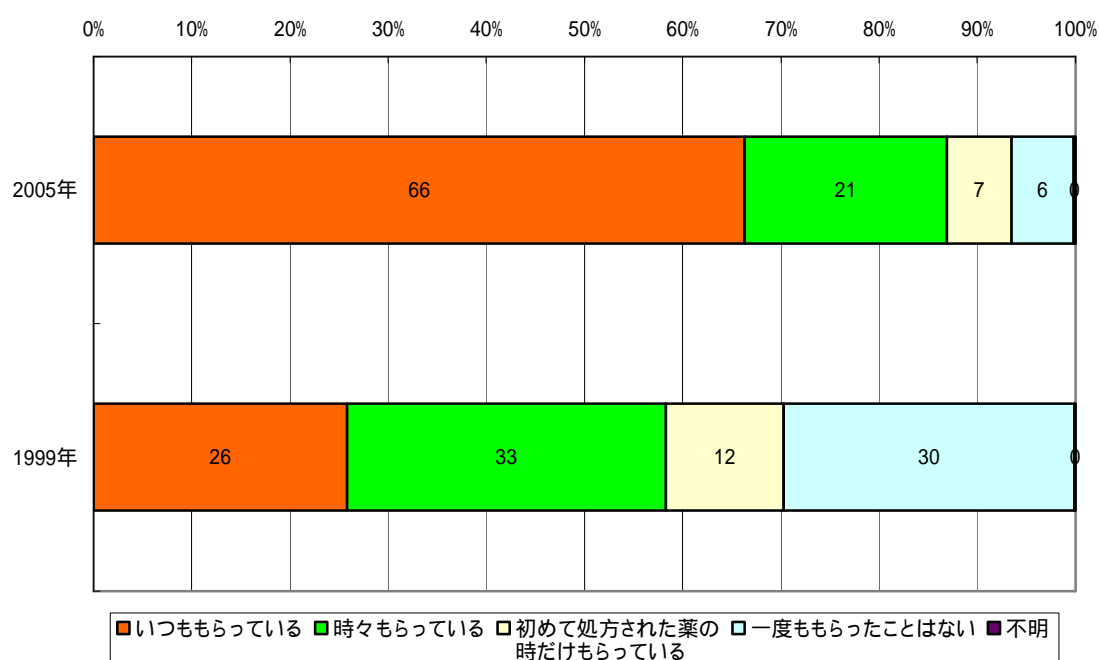


#### 4) 薬の説明書(印刷物)をもらった経験

薬の説明書(印刷物)を「いつももらっている」が66%、「時々もらっている」が21%、「初めて処方された薬の時だけもらっている」が7%で、計94%が説明書(印刷物)をもらっている。99年調査では、それぞれ順に26%、33%、12%の計71%であったことから、説明書(印刷物)をもらった経験がある者が大幅に増えている。特に「いつももらっている」の増加が著しい。なお、慢性疾患で通院している者とそれ以外の者とではそれぞれ68%、66%と特に差異は見られていない。

あなたは、病院・医院や調剤薬局で、薬の説明が書かれた紙(印刷物)をもらったことがありますか。( はひとつ)

n=1607



#### 5) 薬の説明書をもらいたい意向

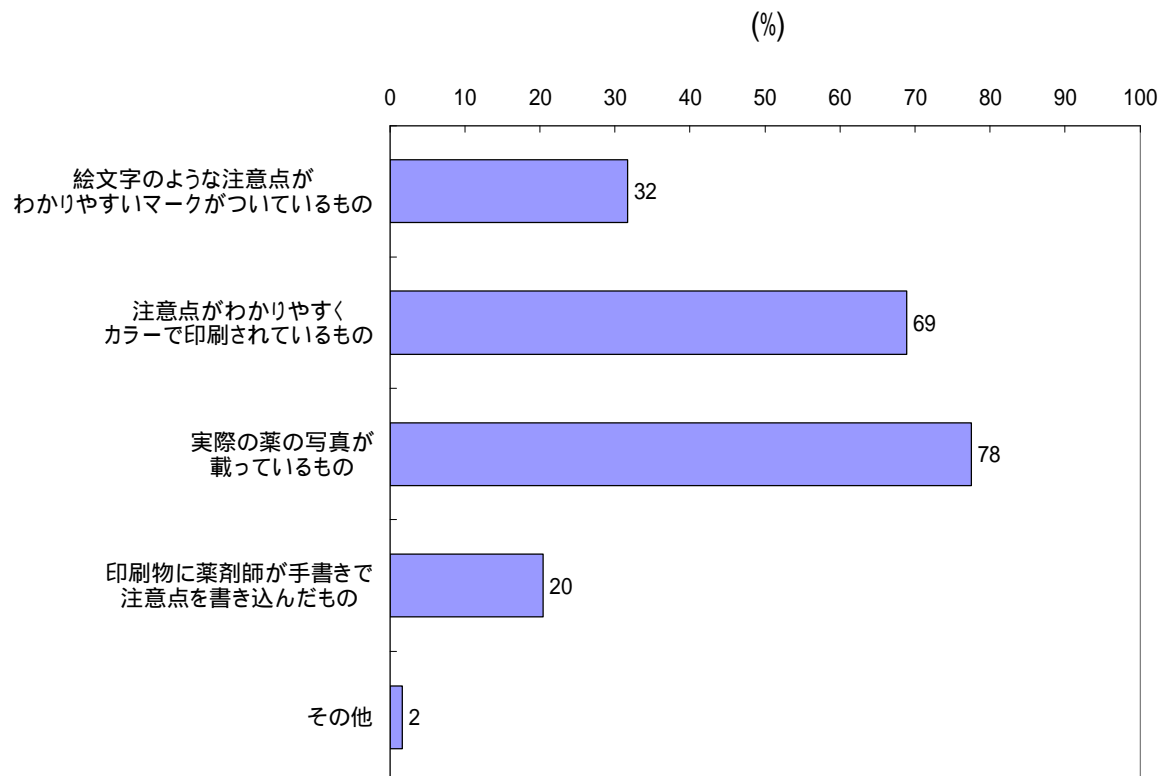
薬の説明書(印刷物)を「もらいたい」は91%、「特に必要ない」は9%で、99年調査の「もらいたい」88%よりも若干増加しているがあまり変化は見られなかった。

薬の説明書(印刷物)として希望する形態には、「実際の薬の写真が載っているもの」が78%と最も高く、次いで「注意点がわかりやすくカラーで印刷されているもの」が69%、「絵文字(ピクトグラム)のような注意点がわかりやすくマークがついている」が32%であったことから、視覚に訴える説明書(印刷物)が望まれていると考えられる(複数回答)。



あなたは、薬の説明が書かれた紙（印刷物）として、どのようなものがあるとよいと思いますか。（はいくつでも）

n=1607



### 3. くすりの服用

#### 1) 処方薬の服用状況

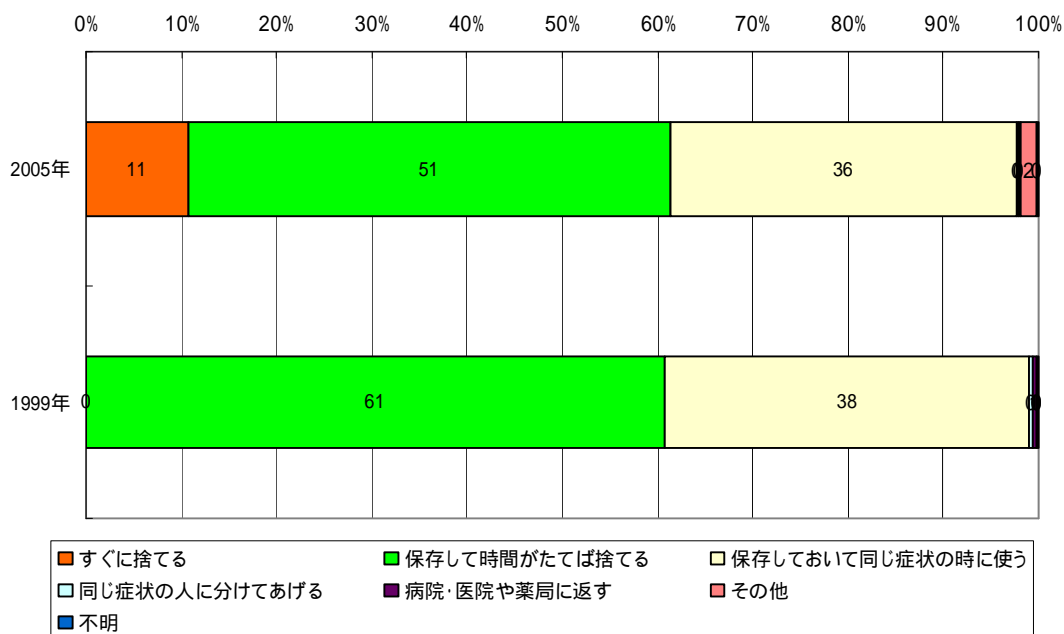
処方薬の服用について、「きちんと指示通りに飲む」が 38%、「だいたい指示通りに飲む」が 57%である。99年調査では、それぞれ順に34%、57%、合計91%であるので、若干は増加しているがほぼ同水準と考えられる。なお、「きちんと指示通りに飲む」に関して、慢性疾患で通院している者が 42%、それ以外の者で 36%であり、大きな差異は見られなかった。

#### 2) 処方薬が余った時の対処法

処方薬が余った時の対処法としては、「保存して時間がたてば捨てる」が 51%、「すぐに捨てる」が 11%であり、62%が余った薬を捨てている。一方、「保存しておいて同じ症状の時に使う」は 36%であった。99年調査では、「保存して時間がたてば捨てる」が 61%、「保存しておいて同じ症状の時に使う」が 38%であることから、同様の傾向であった。なお、慢性疾患で通院している者では、「保存しておいて同じ症状の時に使う」が 40%、それ以外の者では 35%であり、あまり大きな差異は見られなかった。

あなたは、普段、医師が処方した薬が手元に余った場合、どうしていますか。  
最もあてはまるものひとつに をつけて下さい。( はひとつ)

n=1607



#### 4. くすりの副作用に関する意識

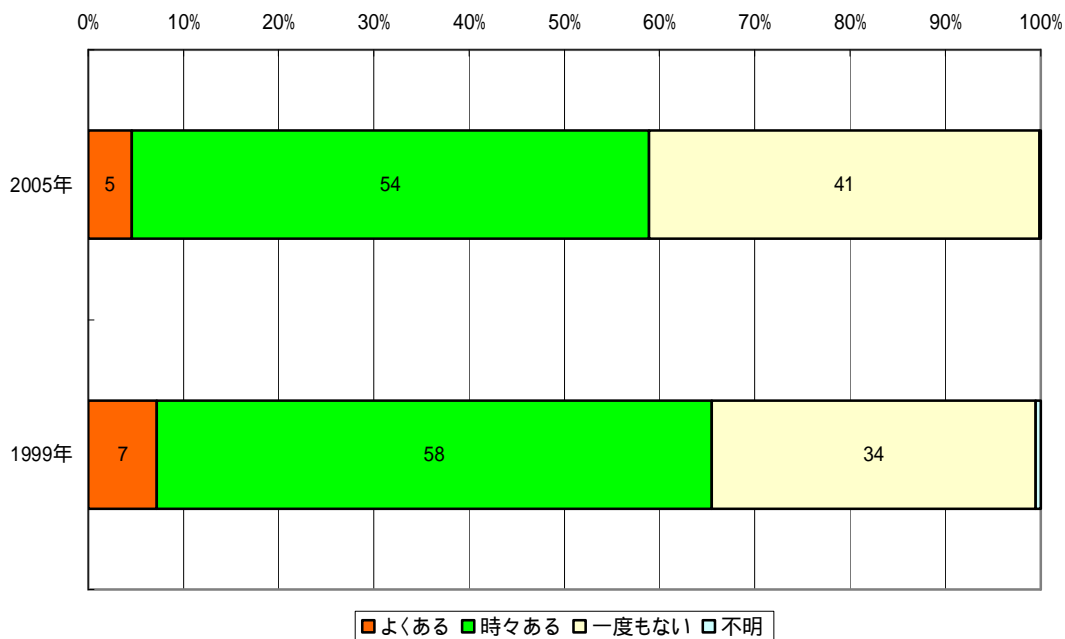
##### 1) 処方薬に対する不安感

医師が処方した薬について不安に思ったことが「よくある」は 5%、「時々ある」が 54%、「一度もない」が 41%であった。99 年調査では、それぞれ順に 7%、58%、34%であり、あまり大きな変化は見られていない。しかし、不安を感じたことが「一度もない」が今回の調査では多少増加傾向にあった。なお、慢性疾患で通院している者では「時々ある」が 58%、「一度もない」が 37%であり、それ以外の者での 53%、43%と比較して、不安感が多少強い傾向にあった。

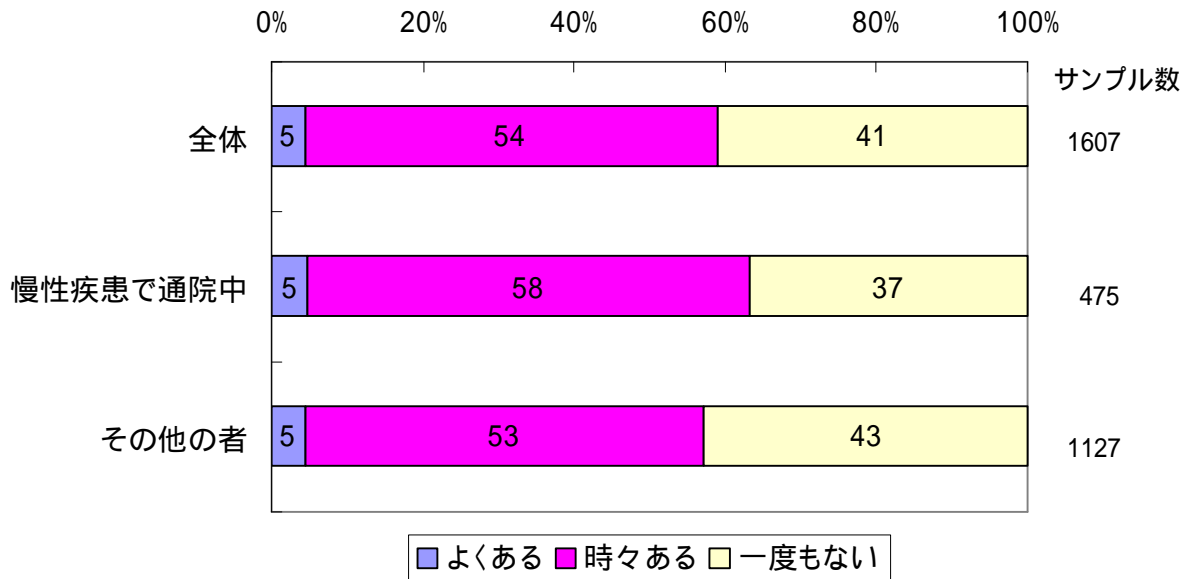
あなたは、医師が処方した薬について、不安に思ったことはありますか。

( はひとつ )

n=1607



処方薬に対する不安感



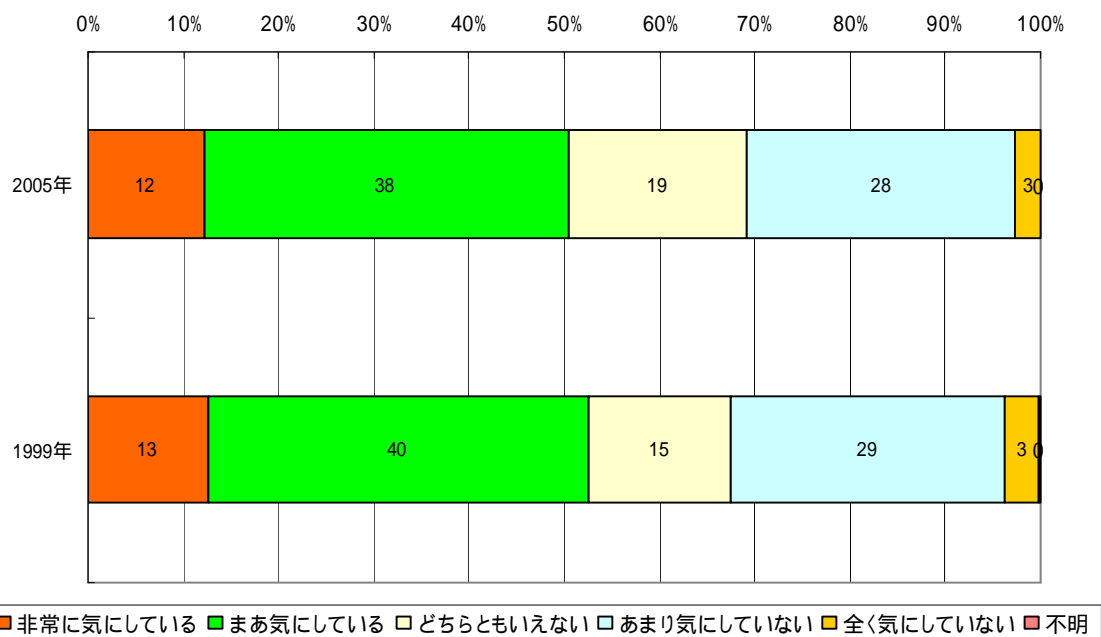
2) 副作用に対する懸念

薬の副作用について、「非常に気にしている」が12%、「まあ気にしている」が38%であり、50%が副作用を気にしている。99年調査では、それぞれ13%、40%で合計53%であり、ほぼ同じ傾向にあった。慢性疾患で通院している者で副作用を気にしているは61%、それ以外の者での47%に対しより高い傾向にあった。

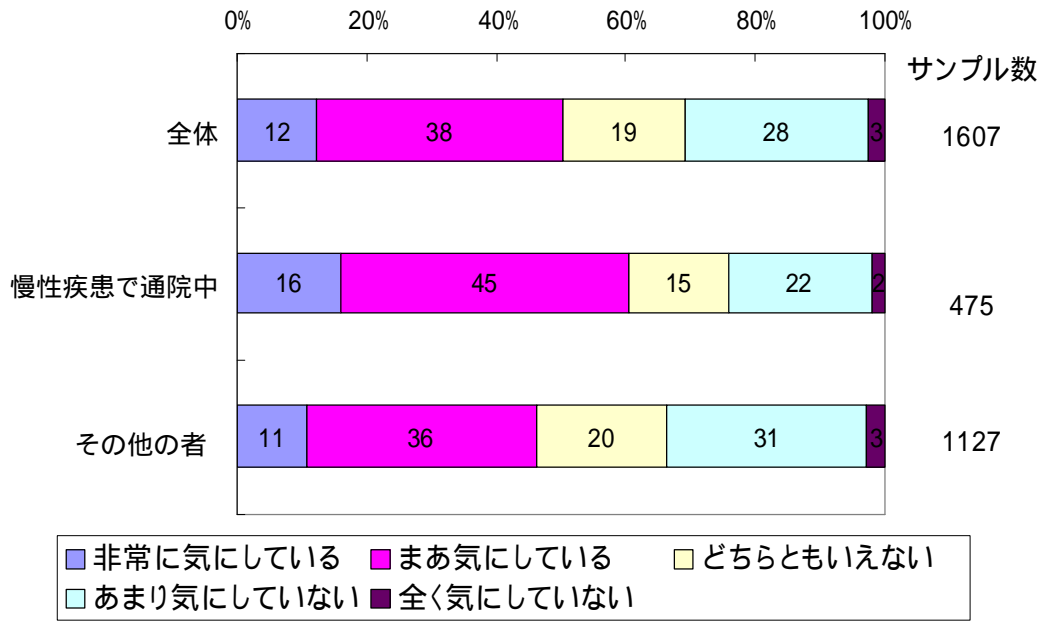
あなたは、医師が処方した薬を飲むとき、副作用をどの程度気にしていますか。

( はひとつ )

n=1607



### 副作用に対する懸念



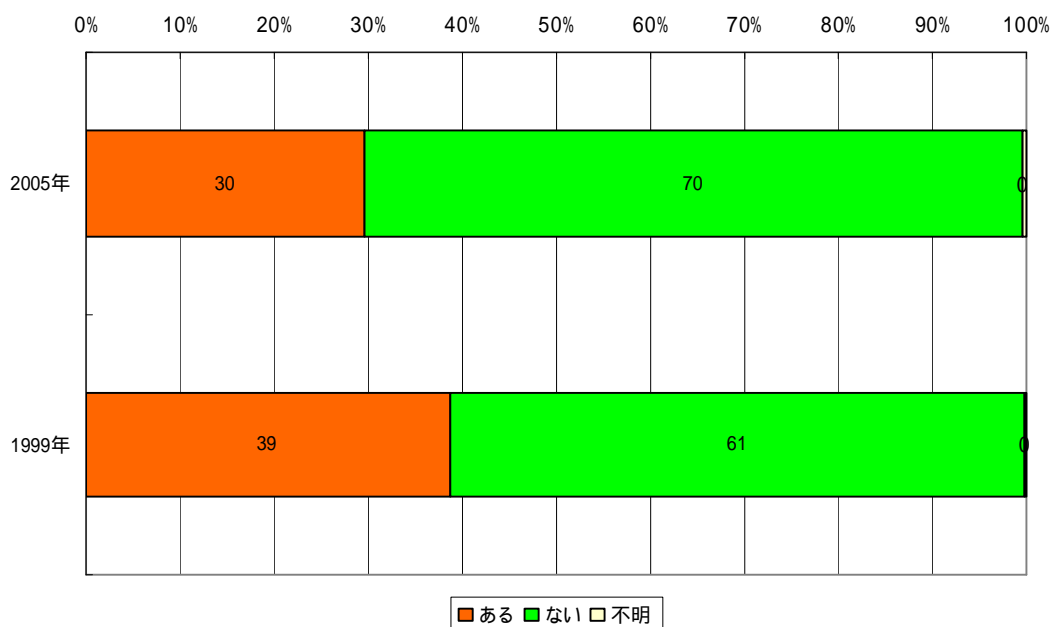
### 3) 副作用経験の有無

過去に処方薬の副作用を経験したことが「ある」は30%、「ない」が70%であった。99年調査ではそれぞれ39%、61%であり、副作用経験者が減少傾向にある。慢性疾患で通院している者で副作用の経験があるは43%、それ以外の者の24%と大きな差異が見られた。

なお、副作用が出た時の対処法としては、「医師に相談した」が74%で最も多く、次いで「薬を飲むのをやめた」が40%であった。慢性疾患で通院した者では、「医師に相談した」が86%で、それ以外の者の65%を大きく上回った。

あなたは、過去に、医師が処方した薬の副作用と思われる経験をしたことがありますか。  
( はひとつ )

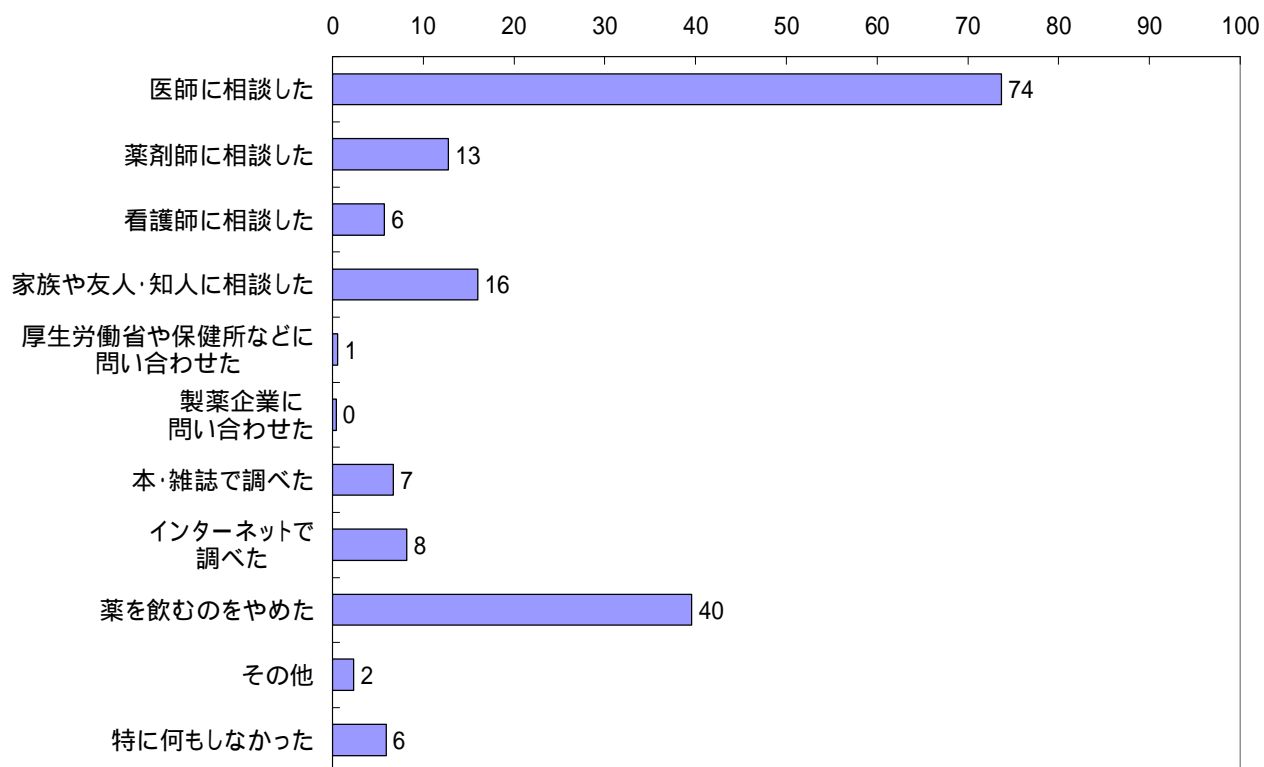
n=1607



あなたは、医師が処方した薬の副作用が出たと思われた時に、どのようにしましたか。

(はいくつでも)

n=475

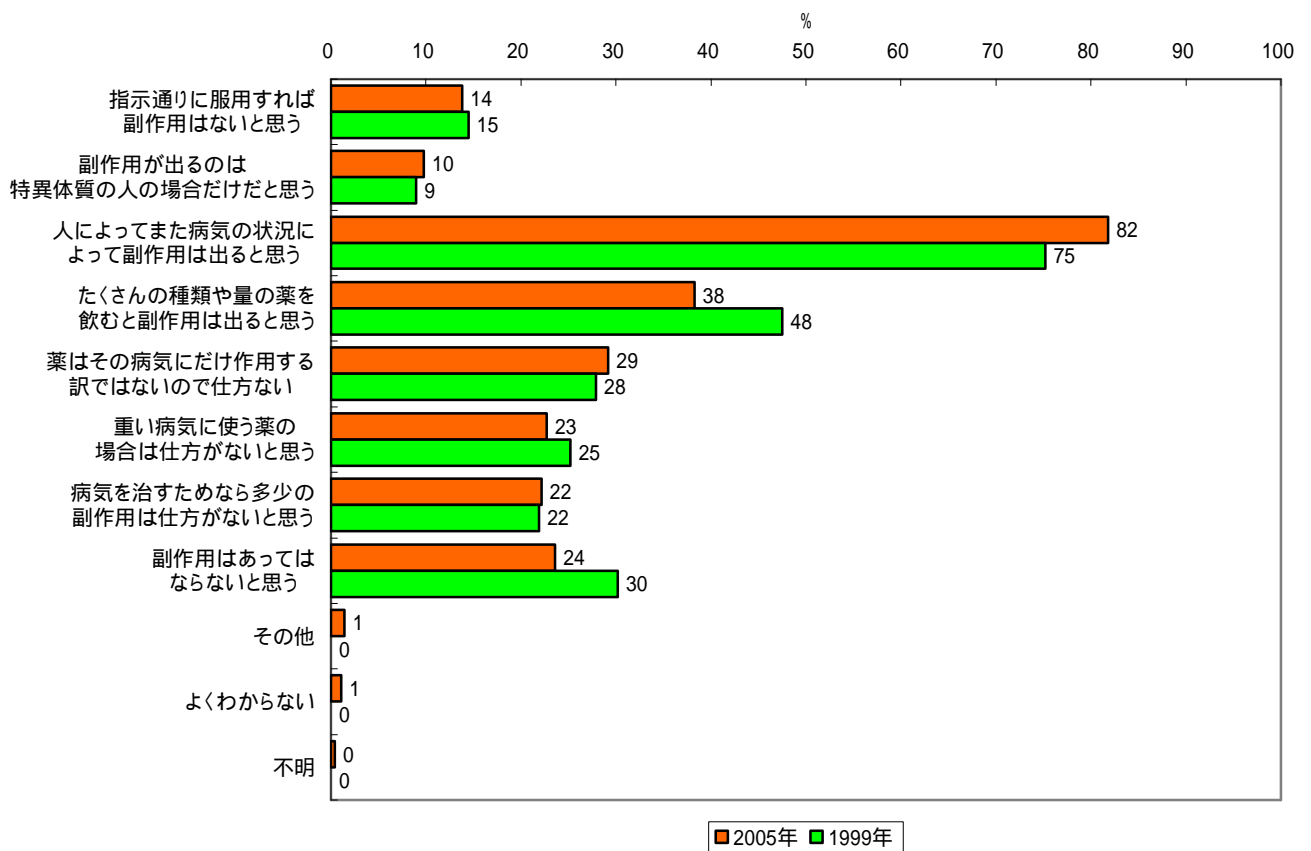


#### 4) 薬の副作用についての考え (複数回答)

薬の副作用について、「人によって、またその人の病気の状況によって副作用が出たり出なかったりすると思う」が 82%と最も多く、次いで「たくさんの種類や量の薬を飲むと、副作用は出ると思う」が 38%であった。99 年調査ではそれぞれ 75%、48%となっており、あまり大きな変化は見られなかった。なお、慢性疾患で通院している者では、「病気を治すためなら、多少の副作用は仕方ないと思う」等、副作用に対する容認度が高い傾向にあり、副作用をベネフィットとの対比で認知している傾向があるように思える。

あなたは、医師が処方した薬の副作用について、どうお考えですか。あなたのお考えにあてはまるものすべてに をつけて下さい。( はいいくつでも)

n=1607





## 副作用についての考え

	指示通りに服用すれば副作用はないと思う	副作用が出るのは特異体質の人の場合だけだと思う	人によってまた病気の状況によって副作用は出ると思う	たくさん種類や量の薬を飲むと副作用は出ると思う	薬はその病気にだけ作用する訳ではないので仕方ない	重い病気に使う薬の場合は仕方ないと思う	病気を治すためなら多少の副作用は仕方ないと思う	副作用はあつてはならないと思う	その他	よくわからない	サンプル数
%											
全体	14	10	82	38	29	23	22	24	1	1	1607
慢性疾患で通院中	14	7	83	43	36	25	31	23	1	1	475
その他の者	14	11	81	37	26	22	19	24	2	1	1127

## 5. 医薬分業

### 1) 医薬分業の推進に対する認知

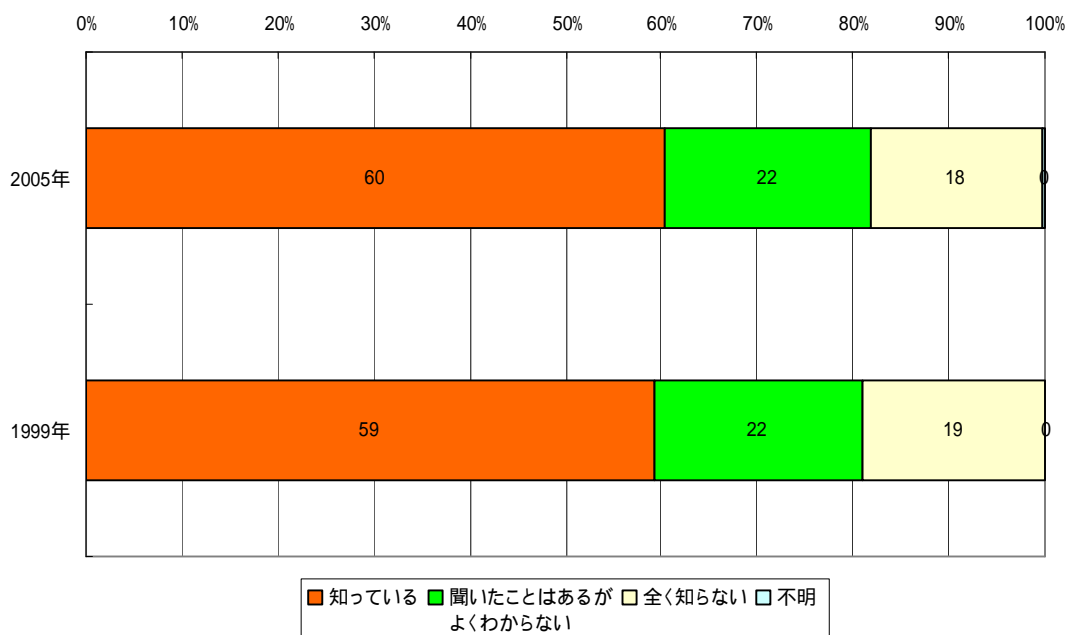
国が後押している医薬分業について、「知っている」が60%、「聞いたことはあるがよくわからない」が22%、「全く知らない」が18%であった。99年調査では、それぞれ59%、22%、19%であり、ほぼ同じ水準に留った。なお、慢性疾患で通院している者では「知っている」が74%と、それ以外の者の55%を大きく上回っている。

医薬分業について、好ましいと考えている場合の理由として、「薬の説明をしてくれるので好ましい」(50%)、「薬を受け取るまでの時間が短縮されるので好ましい」(40%)などがあげられる。99年調査では、それぞれ45%、44%であり、「薬の説明をしてくれるので好ましい」がやや増加しているものの同様の傾向と見られる。

一方、医薬分業の問題点としては、「経済的負担が増えるのでよくない」が42%、「病気のときに薬局まで薬を取りに行くのが大変」が38%であった。99年調査では、それぞれ36%、36%であるので、若干、医薬分業の問題が増えている傾向にある。

現在、国の方針として医薬分業（病院や医院で処方され、調剤薬局で薬を受け取る）が進められていますが、あなたは、ご存知ですか。（ はひとつ）

n=1607



## 6. 学校教育関連

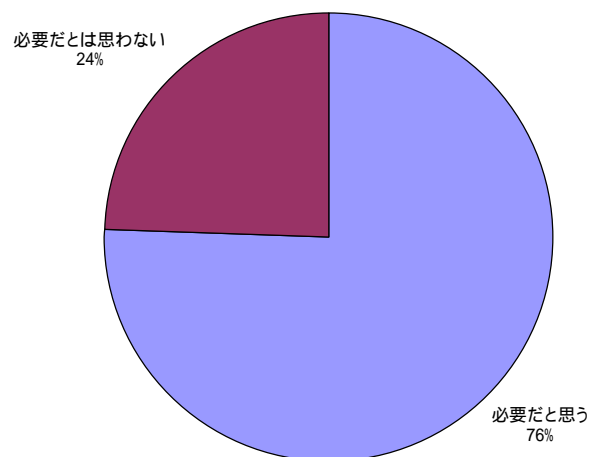
### 1) 学校教育で薬の正しい使い方を教育することについての考え

学校教育で薬の正しい使い方を教育していくことについて、「必要だと思う」が 76%、「必要だと思わない」が 24%で、教育の必要性を感じる者が多いことが明らかになった。なお、慢性疾患で通院している者では「必要だと思う」が 82%と、それ以外の者の 73%を上回っている。

学校教育で取り上げるべき事柄としては、「くすりは正しく安全に使用すること」が 78%で最も多く、次いで「知識と適正な使用について年齢に応じ段階的に指導すること」が 51%、「偶発的な医薬品事故(中毒)から身を守ること」が 50%と続いている。なお、慢性疾患で通院している者では、それぞれ 81%、56%、52%で、それ以外の者の、76%、49%、49%を上回っており、教育の必要性についてより高い意識を持っていると考えられる。

あなたは、学校教育としてくすりの正しい使い方などを教育していくことについて、  
どうお考えですか。( はひとつ)

n=1607



あなたが、学校教育として取り上げるべきだと思う事柄に をつけて下さい。

( はいいくつでも)

n=1215

